

昭和批評大系



昭和初年代

番町書房

昭和批評大系 第一卷（昭和初年代）

昭和四十三年五月十五日 印刷

昭和四十三年五月二十五日 發行

定価 一八〇〇円

編者代表 村松剛

佐伯彰一
大久保典夫

検印廃止

發行者 遠藤左介

發行所 番町書房

東京都中央区京橋三丁目五番地

電話 東京 五六七―〇三一一

振替 東京 一五八四四

印刷 凸版印刷株式会社

製本 株式会社板倉製本

© 1968 Printed in Japan

（乱丁・落丁本はお取替えいたします）

昭和批評大系

第一卷(昭和初年代)

目次

第一部

西方の人

芥川龍之介 吳

新感覺派とコンミニズム文學

横光利一 五

プロレタリア・レアリズムへの道

藏原惟人 壹

文學形式問答

谷川徹三 三

政治的價值と藝術的價值

平林初之輔 五

—マルクス主義文學理論の再吟味—

平林初之輔 五

「敗北」の文學

宮本顯治 五

—芥川龍之介の文學について—

宮本顯治 五

様々なる意匠

小林秀雄 二〇

藝術に政治的價值なんてものはない

—「政治的價值と藝術的價值」とか「文藝批評の座標」とか「批評の基準」といふもの

中野重治 三

について—

中野重治 三

超現實主義詩論

— PROFANUS —

西脇順三郎 二三

「ナップ」藝術家の新しい任務

— × × 主義藝術の確立へ —

藏原惟人 二四

藝術派宣言

— 新藝術派は如何にして起り、何を爲すか
の問題 —

雅川 混 二五

自然人と純粹人

河上徹太郎 二六

主知的文學論

— 主知的文學論の略圖 —

阿部 知 二 二七

「意識の流れ」と小説の構成

春山 行 夫 二八

新心理主義文學

伊 藤 整 二九

芥川龍之介と志賀直哉

井上 良 雄 三〇

作家のために

— 作家の資格と任務と權利と —

林 房 雄 三一

右翼的偏向の諸問題

小林 多 喜 二 三二

故郷を失つた文學

小林 秀 雄 三三

不安の思想と其の超克

三木清 二五

創作方法上の新轉換

徳永直 三三

末期の眼

川端康成 三三

陰翳禮讚

谷崎潤一郎 二四

文學と生活

唐木順三 三五

轉形期に於ける作家の自我について

龜井勝一郎 三六

文學の方法論的享受

生島遼一 三九

—ジッド、ヴァレリ等の文學と我々—

小説のことなど

堀辰雄 三七

—モオリアックの小説論を讀んで—

藝術の限界と限界の藝術

保田與重郎 三六

冬を越す蕾

中條百合子 三三

シエストフの思想

阿部六郎 三六

行動主義理論

小松清 三四

轉向作家論

中村光夫 三四

純粹小説論

横光利一 三三

藝術の國民的形態と國際的形態

勝本清一郎 三〇

第二部

文壇ギルドの解體期

—大正十五年に於ける我國チャイナリズムの

一断面—

『陣痛期の文藝』序

大宅 壯 一頁

橋 爪 健 三頁

無産階級文學の分裂と兩派の主張

—組織にあらはれた『老藝』の本質—

中野 重 治 三三頁

佐佐木 孝 丸 三三頁

—對立の根據—

小さな墓標

秋 田 雨 雀 三六頁

『前衛』創刊の辭

前衛藝術家同盟 三六頁

前衛藝術家同盟 聲明・綱領・規約

前衛藝術家同盟 三六頁

『前衛』創刊號編輯後記

編輯委員會 三六頁

『詩の原理』序

萩原 朔 太郎 三六頁

日本左翼文藝家總聯合會

藏 原 惟 人 三七頁

日本プロレタリア藝術聯盟・

前衛藝術家同盟合同に關する聲明

全 無産者藝術連盟 本 三九頁

『戦旗』創刊號編輯後記

左傾について

左翼藝術同盟解體に關する聲明

『高橋新吉詩集』編者の言葉

『文壇從軍記』(抄)

『文學』創刊號編輯後記

藝術派とプロ派との討論會

—第七十九回新潮合評會—

アシルと龜の子

—一つの根本的問題に就いて—

新人才華

藝術大衆化に關する決議

勞農藝術家聯盟分裂に關する聲明

ナツプ機關誌創刊に際して

『貝殼追放』

—文壇游泳術—

農民文學の新しき轉向

戦旗編輯局 〇〇

片岡 鐵 兵 〇〇

左翼藝術同盟 〇一

佐藤 春 夫 〇三

杉山 平 助 〇三

犬 養 健 〇五

川端 康 成 他 〇六

小 林 秀 雄 〇三

川 端 康 成 〇九

日本プロレタリア作家
同盟中央委員會 〇二

全日本無産者藝術
團體協議會 他 〇三

全日本無産者
藝術團體協議會 〇三

水上瀧太郎 〇三

—『農民とプロレタリア文學』其の二—

小林秀雄 『文藝評論』誌上出版記念會

—讀了直後のとき—

「戲作的態度」について

『書方草紙』序

ベルリンからの緊急討論

大衆文學の辯

—正宗白鳥氏に答ふ—

『コギト』創刊號編輯後記

新社會派と新心理派

プティ・ブルジョア・

インテリゲンツィアへの道

共同被告同志に告ぐる書

『文學界』創刊號 六號雜記

現在における文藝上の我立場・主張

文藝復興座談會

池田 壽夫 四三

井 伏 鱒 二 四三

尾 崎 士 郎 四三

横 光 利 一 四三

勝 本 清 一 郎 四三

直 木 三 十 五 四二

保 田 與 重 郎 四三

瀨 沼 茂 樹 四三

平 野 謙 四三

佐 野 學 四三

鍋 山 貞 親 四三

林 房 雄 四三

室 生 犀 星 他 四三

菊 池 寛 他 四三

『文學評論』創刊號編輯後記

演劇當面の問題

『日本浪漫派』廣告

行動主義文學の批判

——日本の行動主義文學に限定して——

リルケの影

偶然文學論

芥川龍之介賞經緯

『風土』序言

『文化の擁護』編者の言葉

研究ノート

第一部 研究ノート

第二部 研究ノート

口絵写真解説

年表（昭和初年代）

四二

岸田國士 四三

保田與重郎他 四七

戸坂潤 四八

片山敏彦 五三

中河與一 五五

久米正雄他 五九

和辻哲郎 五七

小松清 五八

大久保典夫 五三

保昌正夫 五五

保昌正夫 五五

高橋春雄 六一

裝釘 上口睦人

凡 例

一、収録作品を第一部・第二部に分け、相互に補足しあって、有機的・立体的な批評史を編成するようにつとめた。

一、第一部にはおよそ主流的な論文をあつめ、第二部では資料的な面に重点を置いて編集した。

一、本文は原文の正確な復原につとめて、できるかぎり初出にしたがった。

一、作品の配列は、おおむね発表年次順によった。

一、各作品の用字、かなづかい、句読などは、原則として原文のままとし、傍点・

ふり仮名などは編集部で適宜取捨した。

一、研究ノート・解説などに際しては、書名・人名・引用文に限り、正字・旧かなづかいを用いた。

昭和批評大系 第一卷 (昭和初年代)

日本的近代の逆説

磯

田

光

一

芥川龍之介の『或阿呆の一生』のなかに、次のような一節がある。

それは或本屋の二階だった。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探していた。モオバスサン、ポオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、ショウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。(中略)彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いている店員や客を見下した。彼等は妙に小さかった。のみならず如何にも見すばらしかった。

「人生は一行のポオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からこう云う彼等を見渡していた。

これをひとつの象徴的な風景として眺めるならば、この単純明快な構図のうちに、大正末期から昭和初年にかけての日本の知的風土の構造が、心にくいほど巧みにとらえられている。書棚に並んでいるのは、「モオバスサン、ポオドレエル、ストリントベリイ」など西欧近代の作家であり、このような形で本屋の店頭に入ってきた「西洋」は、作家である「彼」にたいして、「人生は一行のポオドレエルにも若かない」という信念を植えつけたのであった。しかしそれにもかかわらず、これらの西欧近代の天才たちとは別の次元に、「妙に小さく」「如何にも見すばらし」い存在として、「本の間に動いている店員や客」たちの姿もあつたのである。「一行のポオドレエル」の前には、「店員や客」の姿はとるに足らないものであつたかもしれない。いや大正期の作家たちにとっては、世俗からの距離を保証する標識として、「一行のポオドレエル」が信じられていたといつてもさしつかえない。むしろここにいう「一行のポオドレエル」は、「芸術」の神であろうと、普遍的な「人類」の理念であろうと、大差はない。問題はそれが「西洋」から入ってきた理念であるということ、そしてまた、その「理念」が「和魂」に支えられることによって、日本のな理想主義として開花したということを、私たちは十分に認識しておけばよい。それは文字どおり「和魂」あつての「洋